

第一四三回 昭和六十一年二月二十三日

史跡めぐり (上板橋地区)

越谷市郷土研究会

と き 昭和六十一年二月二十三日

コース 南越谷 北朝霞のりかえ 東武練馬 石観音 下練馬宿

上板橋村 茂呂遺跡 安養院 氷川神社 昼食

天祖神社 上板橋宿 くつわ神社 尊祿院 中板橋駅

北朝霞經由 南越谷 開散

東道役 理事 丸田富夫

下練馬宿

川越街道の二番目の宿場 上校橋宿にくらべてきわめて小規模で文政六年
の記録では人家は九〇戸であつたという

石観音

三角形の狭い敷地に、昭和五年に建てられたミニ仁王門があり、天和三年
(一六八三)造立の石像に王像が祀られている。この奥の小さなお堂に
石造の聖観音像が安置されている。この聖観音は天和二年の作である。
このほか敷地には、正徳四年(一七一四)と寛延三年(一七五〇)造立の
庚申塔や馬頭観音塔ニ基があり、いまも地元の手に厚く祀られている。

大山道しるべ

ここから三〇〇メートルほど行くと右側にニ基立っている。
宝暦三年(一七五三)の銘がある。

上板橋村

野方領 日本橋より二里半 延宝二年(一六七四)検地 幕府直轄御領

村高 二千六百四十二石一斗七合

この反別 三百九十八町一反七畝

内

田 六十町六反一畝
畑 三百三十七町五反六畝

家数 三百九十七戸

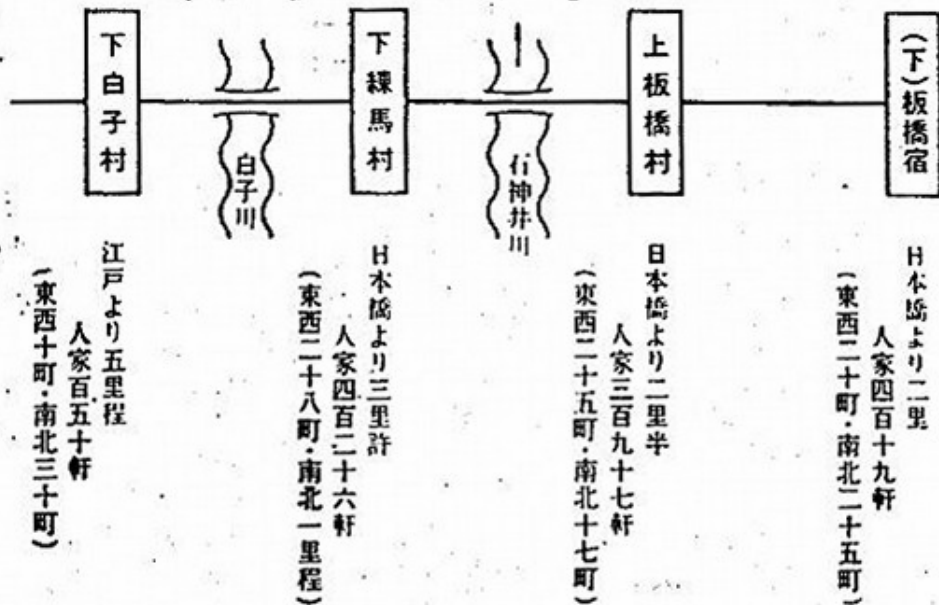
文政六年の村明細帳による

五本けやき

上板橋村初代村長飯島弥十郎氏宅の屋敷村であつたが昭和十二年新川越街道が開通したとき残された。

宝田稻荷

もとい千代田村(現皇居附近)にあつたが、江戸城を拓げるとき移された。当初は城北中央公園内の高台に祀られていたが、そのころは栄えていた。



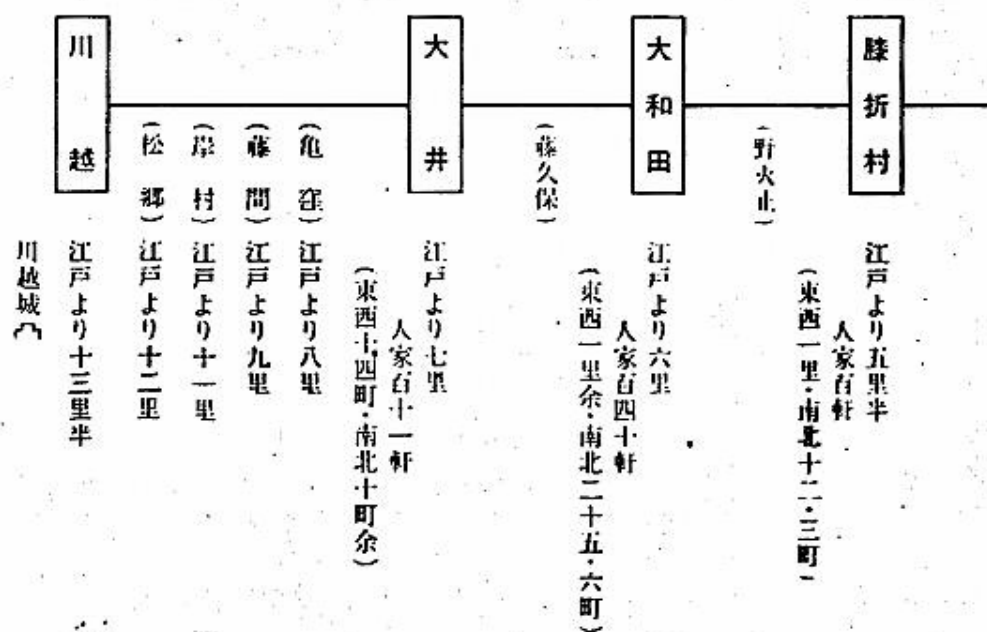
(1) 川越街道

慶長五年(一六〇〇)から同八年(一六〇三)にかけ江戸幕府の大交通路事業により五街道が整備されましたが、その街道の一つ、中山道の脇街道が川越街道で、公的には川越道中と呼ばれておりました。

中山道は日本橋を起点とし、北にむかってすすみ神田川(昌平橋)を渡り、本郷台地を通過して森川宿に達します。ここで、岩槻街道と分かれ、さらに西北にすすみ巢鴨から滝野川を経て第一の宿駅が「板橋宿」になります。

この板橋宿平尾から西方へ分かれ、武蔵野台地を西北に走り、川越城下に達する全長十三里半(五十二キロメートル)の道程が川越街道のすべてです。

この間、江戸日本橋から二里半(十キロメートル)の上板橋村に第一の駅(宿)を置き、隣村の下練馬村から白子川を渡り、旧新座郡の白子宿・膝折宿・大和田宿を経て入間郡に入り、大井宿を通過して川越城下に達します。

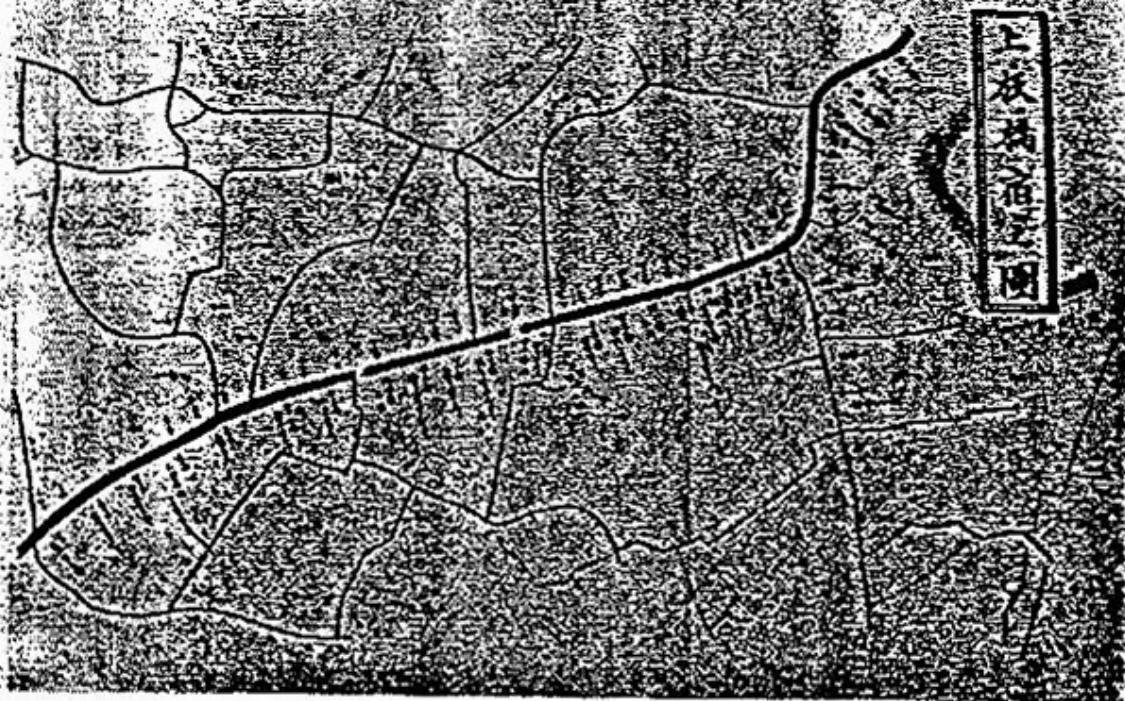


一般に脇街道の場合、運輸・宿泊施設の整っていた本街道にくらべ、宿駅の施設は不十分で常備人馬も少なかったようです。しかし、江戸時代の終りごろになると庶民の通行や、商人荷物の輸送の占める比重が高くなり、高くなり、宿場としての体裁を整えていきました。

上板橋宿もこのように江戸末期になってから、宿場として発展してきたようです。

しかし、川越街道そのものは、五街道より古くから開けていた古道といわれています。それは、川越地方が中世の立役者武蔵七党の一つに数えられる村山党に属する仙波氏の本貫地であったことや、その後、太田道真・道灌父子が長祿元年(一四五七)川越城を築き、江戸城との連絡にこの川越街道を利用したのではないかと考えられているからです。

また、上板橋村の地も江戸時代以前から開けていた土地柄で、下頭橋付近の石神井川の川底から引きあげられた板碑には永徳三年(一三八三)、六蔵祠の境内にある栗原姓の刻まれた石造物には文明二年(一四七〇)と、江



上板橋宿の図（江戸末期～明治初年）

—板橋区史より—

江戸時代以前の年号がそれぞれ刻まれていますから、これらの石造物はこの時代に石神井川流域に集落が既に存在していたことを証明しています。

江戸時代になると、川越は小江戸ともいわれるように武蔵北部の支配と治安防衛、さらに、江戸市中への農作物を確保するため、特に幕府は重要視しています。そのため川越藩主には酒井重忠、堀田正盛、松平信綱、柳沢吉保など譜代・親藩の有力大名を配置しています。

しかし、この街道の往来は川越藩主のみに限られていたこともあって、各宿場とも常備施設である本陣などの宿泊施設は必ずしも必要とせず、上板橋宿では藩主の休息所として上板橋村名主屋敷をもって本陣代りにしたとも伝えられています。

また、街道の全長が十三里半と短いため、一般の旅人なども早立ちすれば一日の行程であり、上板橋宿には宿泊施設などは殆んどなかったのではないかと思われまます。

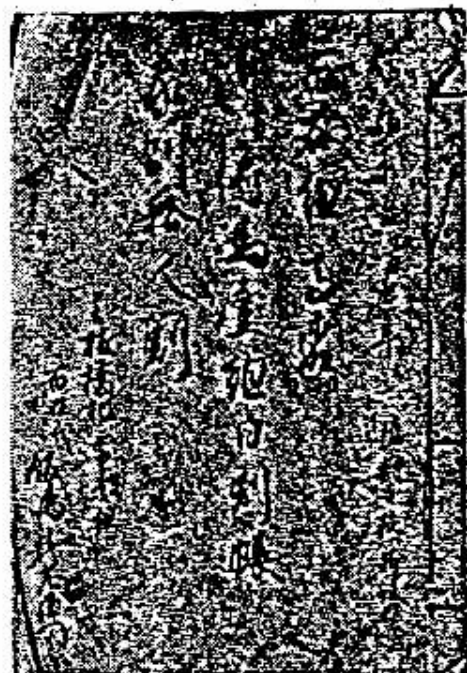
そのため、上板橋宿は宿場といっても板橋宿に比べるとかなり小規模なもので、その機能も「馬次」に代表さ

れるように荷物の運搬が主たる業務であったようです。この馬次の役目は伝馬役と称し、上板橋宿の場合は、文政六年当時、他村からの応援はなく上板橋村全域で負担しておりました。そのため、天保十三年（一八四二）上板橋村が公式に上板橋宿と改称された時には、街道沿いの宿内だけでなく、上板橋村全域が上板橋宿と呼ばれるようになり、この名称は明治二十三年（一八八九）まで約五十年間にわたり使用されていきました。

(2) 宿場時代の上板橋

江戸時代における上板橋宿の様子は、明治以降の名主家（河原）の離散ということもあって、その史料はほとんど遺されていません。僅かに、文政六年（一八〇九）十月、上板橋村名主与右衛門・年寄長右衛門の兩名により、幕府の地誌御調御用出役宛に村内の地誌を報告しています。この文書（以下 書上げという）が、上板橋宿の概要を伝える唯一の公文書といえます。後にこの書上げは、幕府が編さんした「新編武蔵風土記稿」の史料として同書に大部分の記事が収められました。

この書上げによれば、文政六年当時の上板橋村は「えび山」「大谷口」「向原」「江古田」「小竹」「根ノ上」「小山」「毛呂」「栗原」「上ノ根」「台宿」「原」「向屋敷」の十三の小字に区分されておりました。このうち、「えび山」が宿にあたります。村内の家数は三百九十五軒と記されていますが、そのうち、五十八軒は空屋などになっていたので、実際には三百三十軒の家があったにすぎません。宿内（現 弥生町）には九十軒の家が建ち並び、村内では一番人口が密集していたこととなります。村内を従貫する川越街道は二十五町五十五間（約三・八キロメートル）で、宿内にかかわる部分は六町四十間（約七百四十メートル）、その道巾は三間（約五・五メートル）あったと記されています。この上板橋宿と次の下練馬宿までは二十五町（約三キロメートル）、江戸日本橋までは二里半（十キロメートル）、この間の馬次の役目（伝馬役）が上板橋村に課せられた賦役であっ



百石組高森御伝馬老組
日割帳 (嘉永3年)

たのです。

現在、飯島一雄家（桜川）に「百石組高森御伝馬老組日割帳」という古文書が遺っています。これは上板橋宿字栗原の馬次ぎの割当帳で、このような割当帳は上板橋宿の各字ごとにあつたと考えられます。

街道沿いの宿内には、幕府のお触れを掲示する高札場が宿の中程西側にあると書上げに記されていますが、その場所は明示されていません。多分、宿の中程にある名主屋敷あるいは代官屋敷付近にあつたのでしょう。

宿の西端を流れる石神井川には長さ六間半（約十二メートル）、巾一丈（三メートル）の石橋が架かっていました。この橋が現在の下頭橋です。書上げには石橋というだけで、橋の名は記されていません。江戸時代にこの橋を渡った文人は何人もいましたが、赤塚記行を書いた斎藤幸成のみが「けとう橋」と書き記しているだけで、寛政九年（一七九七）ここを通った蜀山人も石橋と記しているにすぎません。

さて、書上げによればこの橋は古来より幕府によって建造された板橋でしたが、宝暦元年（一七五一）、幕府の命により、上板橋村の自普請によって土橋に架け替えています。ところが、大雨のたびに石神井川が氾らんし、この土橋も流され通行止になることがたびたびあつたようです。そのため、上板橋村では洪水に耐えられる石橋を建造することになりました。しかし、当時、上板橋村では石橋を造る財力がなく、他村などの協力を得てようやく石橋が完成しました。ところが、橋の建造費が不足していたこともあって欄干まで造ることができません。

そのため、川の満水時には相変らず通行止めになったり、橋から転落する者もでたのでしよう。そこで上板橋村ではさらに橋の建造費を他村などに依頼し、ようやくにして欄干の付いた石橋が完成したのです。この時、寄付を仰いだ他村などへの感謝の気持と橋の安全を祈願し、供養塔を二基建立したと書上げに記されています。

そのうちの一基は、現在の六蔵祠の境内に建っている寛政十年の年号が刻まれた「他力善根供養」の石塔で、残りの一基は現存していませんが下頭橋を渡り、川越街道と前野道の分岐点に建てられていたようです。

ですから、下頭橋が石橋になったのは、この石塔に記されている寛政十年（一七九八）であったのでしよう。このような橋の建造過程を考えると、他村の力を借りるため名主を始め、村の主だった人々が頭を下げて資金調達に奔走したところから、橋の名もそれに因んで「下頭橋」とつけられたのではないでしようか。

また、この下頭橋付近一帯は、川の氾らんにより泥沼化して村人の生活や、旅人の通行に支障をきたしており、また、このため、天明四年（一七八四）までに、橋の前後、百三十間（二百四十メートル）にわたり、巾三尺（九十センチ）の敷石を付設しています。



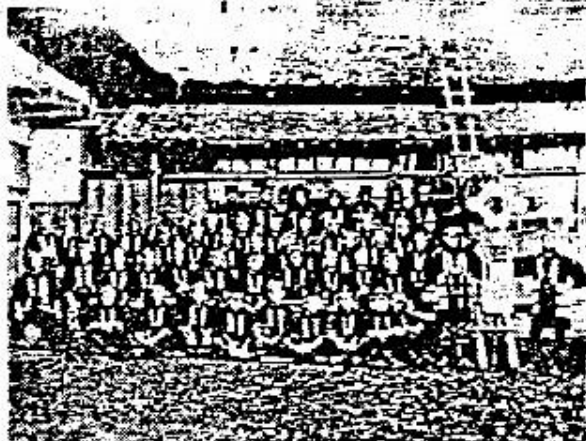
天明4年に敷いた敷石
(六蔵祠境内)

当時、石橋の架設も珍しいと思われませんが、公道に敷石をしいて舗装したことは異例のことでしょう。それだけに、石神井川の氾らんは当時の人々の生活に大きな支障をきたしていたのです。

この敷石は、後年、川越街道が完全舗装になった際、すべて破棄されたことですが、現在、六蔵祠の境内にそれとおぼしき安山岩製の石板が数枚残っています。



絵馬 (弘化3年)
天祖神社蔵



上板橋村消防組 (大正年間)
村役場 (安養院) 前
栗原宣玄氏提供

(3) 上板橋宿の消防組

上板橋村は川越街道の主要駅のうえ、天領(幕府の直轄地)に属していたこともあって、当時、千駄木(現・文京区)にあった御鷹部屋の御抱火消として、上板橋村の消防組が出入りを許されていました。

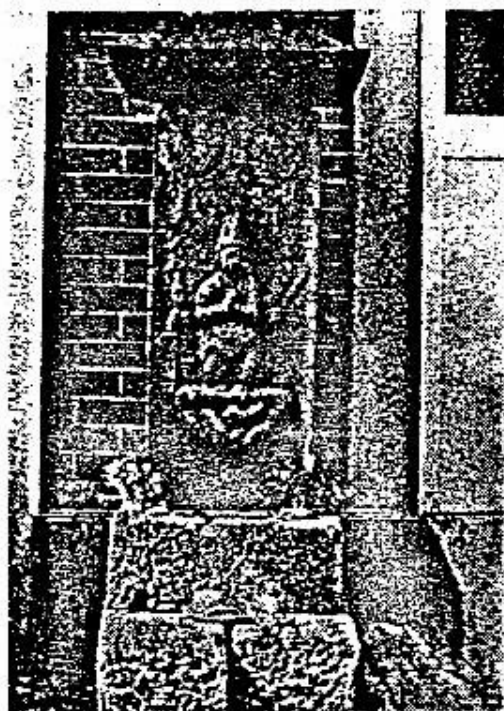
享保六年(一七二一)、江戸市中の大火には、馳付人足百六十七人を御鷹部屋に差しむけたことが、書上げに記されています。この時の大火は焼失家屋十四万戸に及び、明暦三年(一六五七)の大火(振袖火事)に次ぐもので、大火後の江戸市中は物価が上昇し、幕府は物価騰貴の抑制や罹災者に対し貸与金を施す施策をとっています。

この大火の際、上板橋村の消防組は町火消の助力をこたわり、単独で御鷹部屋を守ったと伝えられています。その後、弘化年間には大村兼吉、宝田辰五郎、石田久兵衛、栗原佐衛門、石田長吉、石田亀九郎の六名が組頭となり、上板橋村の消防組は江戸市中までその名を扱めたといわれています。

現在、天祖神社の絵馬堂に弘化三年（一八四六）の年号が記された「武者絵」の大絵馬が残っていますが、その絵馬に当所馳付連中とあります。多分、この絵馬は弘化年間に消防組が再編成された記念に、氏神である天祖神社（当時は神明宮）に奉納されたのではないかと思われます。

(4) 三宿のおこり

ところで、宿内を上宿・中宿・下宿の三宿に区分するようになったのは何時ごろからであったのでしょうか。先の書上げにはこの区分は記されていません。しかし、とうとう稲荷（現、上宿稲荷）の石祠に「寛政八年（一七九六）正月吉日、上宿中」と刻まれ、中宿の地名は、万福寺に所蔵されている念仏用の鐘（鉦）に「文政八年（一八二



海老山（講）の庚申塔

五）酉年九月吉日、中宿」と記されています。また、下宿については、下宿稲荷の境内にあった正徳二年（一七七一）の銘のある庚申塔には「海老山」の地名が刻まれていますから、江戸前期には、下宿のあたりは海老山と称していたと思われます。いずれにせよ、天保十三年に上板橋宿と改称される以前より、街道沿いの宿内は下宿（現・弥生町一ノ十一番）・中宿（同・十四番より）・上宿（同・二十六番より下頭橋）と区分されていたと思われます。

(5) 宿場の機能

馬次場として上板橋宿が取扱ったものは、川越地方をはじめ街道沿いの各村々の農産物が主たるものであったと思いますが、上板橋村名家の文書が遺されていませんので、今日ではその内容を知ることができません。

しかし、安政二年（一八五五）の徳丸原大筒に関する古文書（徳丸本村名主安井家文書）には、徳丸原で行われた砲術訓練に使用する機材類が、江戸から上板橋宿を経て徳丸原に運ばれていることが記されています。これらの機材は農民たちの手によって運ばれていますが、上板橋宿から徳丸原までは徳丸本村や赤塚村の人々がその任にあたっています。このことから類推すれば、江戸から上板橋宿の機材運搬については、上板橋宿の人々が負担したと思われます。この砲術訓練は江戸末期になるとその回数は一層増えていきます。例えば安政二年六月より八月までの間に徳丸原で行われた大筒のけい古は、十二回を数えていますから、徳丸本村や上板橋宿の人々の負担は大変であったでしょう。天保十二年（一八四一）には、高島秋帆が徳丸原で砲術訓練を行うため、外国製のホーイツスル・モチール・ブランドコーゲンと呼ばれる大砲を弟子八十余名に曳かせ、江戸から赤塚の松月院まで運んでいます。この時も、秋帆一行は上板橋宿を経て赤塚にむかったと思われれます。

また、このころになると、幕府の統治力が弱体化し、各地に打ちこわしや農民一揆が続発します。なかでも、慶応二年（一八六六）川越藩領を中心にした武州一揆は、同年六月十四日には成増村に隣接する新座郡白子宿までおよんできました。このため幕府では、中山道の板橋宿とともに上板橋宿についても大木戸（看視所）を設け、江戸市中への一揆の乱入に備えた記録が残されています。しかし、上板橋宿のどこにその施設を設けたか定かではありませんが、板橋宿の大木戸が、「板橋」の橋の手前に設けられていることから、上板橋宿の場合は、上宿の入口にあたる下頭橋付近に設けられたのではないかと思われれます。

(6) 下頭橋の由来

今から二百年前のむかし、上板橋宿のはずれを流れる石神井川には正式な橋がなく、二本の丸太が架かっているだけで大雨のあとなどはこの丸太が流され、旅人はもとより村の人たちも難儀をしておりました。

いつのころからでしょう、この丸木橋のたもとにひとりの男が住みつきました。男は竹の柱に茅の屋根をかけた粗末な小屋を建て、街道を通る旅人から金品をもらって生活をしていましたが、男はほとんど口を開かなかつたので村の人たちは彼の生国も、名前も判りませんでした。しかし、何時とはなしに、六蔵の愛称をつけていたようです。

ある日、五尺の身を雲水に託し、今夜はどここの宿と定めなき足を運ぶ旅僧があり、丸木橋のたもとにたどりつきました。旅僧はこの丸木橋ではさぞかし通行人は難儀していることだと思ひながら、ふとかたわらの粗末な小屋に人の気配を感じ、小屋のなかをのぞいてみました。小屋のなかにはひとりの男が静かに横たわっていました。その顔は土気色に変わっておりすでに死んでいました。六蔵の死はこの旅僧によって発見されたのです。旅僧は六蔵の死顔があまりにも穏かな顔であったので、これは只の乞食ではないと感じ、これも御仏のお導きだと念仏をとなえつつその身体にふれると六蔵の腹巻からおびたらしい金子がでてきました。この金は、六蔵が街道を通る旅人から喜捨を受け、それを大切にしまっておいたのでしよう。仏心を通じたのでしようか、この旅僧はこれのお金で丸木橋を石橋に架け替え、旅人や村人たちの難儀を救いました。橋の架け替えが終ると旅僧は自分のついでいた榎の杖を地面に突き刺し仏の手向とし、いづことなく立ち去りました。村人たちは、この旅僧は弘法大師

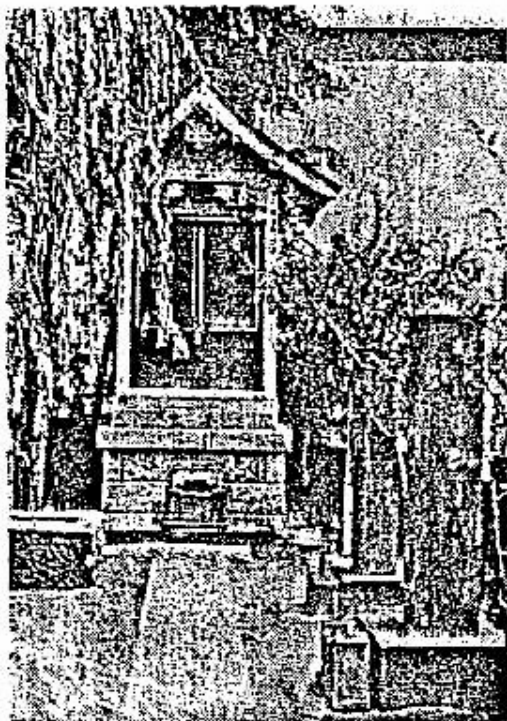
の再来だと感泣したということです。不思議なことにこの杖に根が付き大きな榎の木になりました。そのためいつのころからこの榎を逆榎と称するようになりました。いつのころよりでしょうか、その太い幹に空洞ができ、そこに白蛇が棲みつくようになったのです。そして、このご神木に願をかけると、産婦の乳が良くでるようになるとか虫歯が直るといふご利益があると伝えられ、村内の人はずっとより、他村よりも参詣人がたえることがなかつたと伝えられています。

これも、すべて六蔵さんのお蔭だと村人たちは感謝し、六蔵が頭を下げてあつめた金でできた石橋を下頭橋と名付け、橋畔に六蔵を供養する石碑をたてその霊を祀ったということです。

その石碑は、現在の六蔵祠の境内に建っている「他力養根供養」碑のことと思いますが、この石碑の向かって右側には、雲水が托鉢に行つて立ち去る時に唱える経文（普回向）の一節「願わくはこの功德をもつて普く一切に及ぼし、我等と衆生、皆ともに仏道に成せんことを」が刻まれています。一方、左側には、寛政十戊午歳二月願主、善心、武岳（州）豊島郡上板橋邑（村）河原与右エ門、篠喜平次と記されています。善心とは六蔵のことかあるいは旅僧の法名かも知れません。また、河原与右エ門は上板橋村名主です。

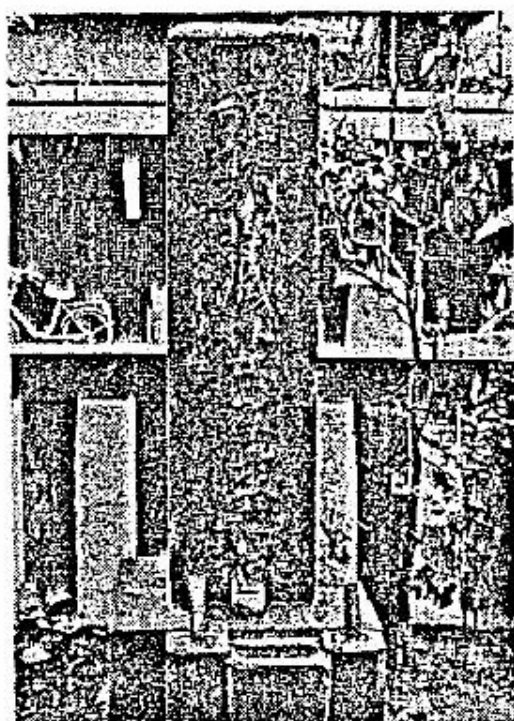
また、逆榎は大正十年ごろまで枝葉が橋の上まで繁り、川面に影を落しておりましたが、その後枯死しその一部が六蔵祠のなかに祀られています。

このように、下頭橋は六蔵と旅僧の善根によって造られたと伝えられ、その後幾度か橋の架け替えが繰り返されて今日にいたっています。六蔵や旅僧の伝説はともかく、この下頭橋は、当時、多くの村人たちの力によって造られたからこそ、このような伝説が語り継がれたと思います。



六 蔵 祠

大正末年になり、向屋敷（現・常盤台一丁目）から分家した河原金五郎さんがこの下頭橋の近くにお店をだしました。ところが、お店の側に建っている石碑に遠方からお詣りに来る人が多いので、不思議に思った金五郎さんは近所の人にその由来を聞いたところだれ一人として知っている人がおりません。その内、下頭橋の架け替え



下 頭 六 蔵 善 薩 之 塔

(7) 六蔵祠と佐藤仙人

大正十年ごろ、現在の十九番地付近の雑木林のなかに小屋がけをして生活をしていた佐藤耶蘇基と名乗る奇人が住みつき、近所の子どもたちはこの人を仙人と呼んでおりました。

その佐藤仙人が下頭橋のたもとに移り住んでからのことです。ある日、彼は草むらに倒れている石碑を見つけその石碑が供養塔であったので丁重に起し、供養を濟せるといずこともなく姿を消してしまったそうです。なにやら六蔵の話に似ているようですが、この時も村人たちは彼の正体を知らなかったため、彼のことも石碑のこともあまり気にとめないでおりました。

工事が始まりましたが、その工事中に石神井川の底から文字の刻まれた石碑が引きあげられました。不思議なことはかり続くので、金五郎さんは古くからこの土地に住んでいる人たちにこのことを聞いてみました。やはりだれ一人として知っている人がおりません。ただ、この橋のたもとにいた仙人なら知っているかも知れないと教えられたので、金五郎さんは、山師の三ちゃん（河原三次郎さん）と宝やのおそばやさん（宝田庄太郎さん）の三人で手わけをして、やつのことでこの佐藤仙人を探し出すことができました。

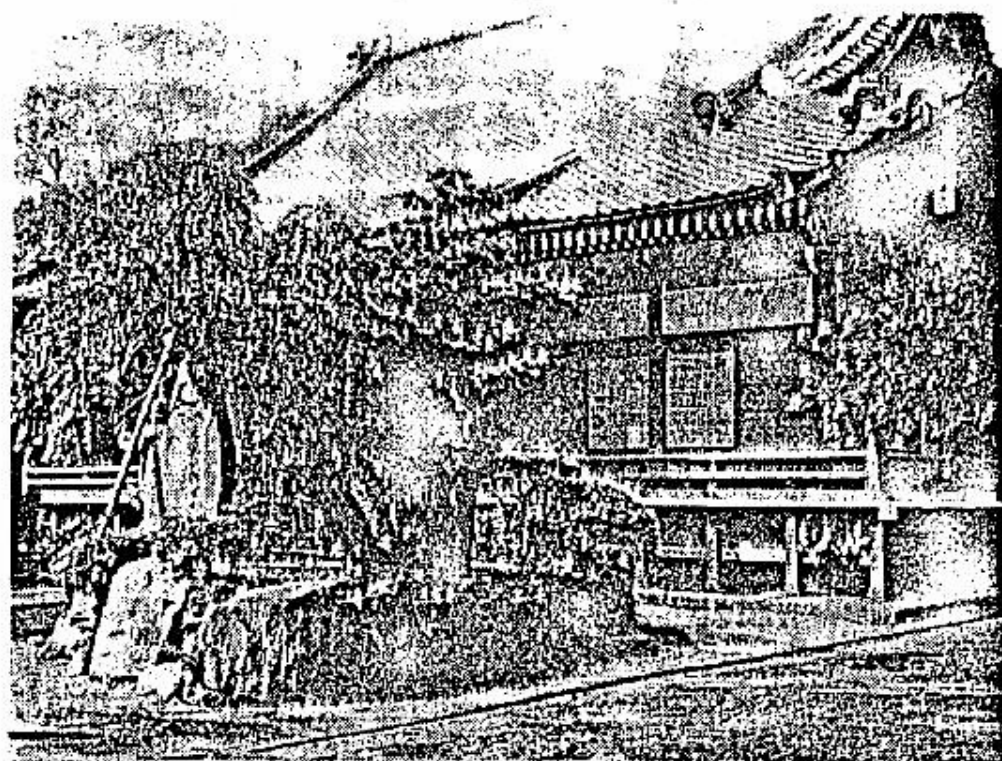
下頭橋から姿を消した佐藤仙人は、そのころ靈活（れいかく）と名乗り相変らずの庵り住いをしていましたが、そのかたわら六蔵の由来を人知れず研究していたそうです。

佐藤仙人の話によると、遠方からお詣りに来る人は石碑にお詣りするのでなく、石碑の側にある逆稜に願を掛けに来ているとのこと。そして、この逆稜に願掛けをすると、産婦の乳房の痛みや胎毒などがたちどころに平癒してしまう靈驗あらたかなご神木であることを話してくれました。

この話を聞いた金五郎さんは、これはきつと下頭橋の恩人である六蔵さまのご利益であるに違いない。そう思うといてもたってもいられず、再び佐藤仙人を訪ね自分の気持を話したところ、それでは六蔵さんを下頭六蔵菩薩としてお祀りしたらよかろうと教えられました。そこで金五郎さんはこのことを村の主だった人たちに相談し、六蔵さんをお祀りすることになったのです。これが現在祀られている六蔵祠なのです。

佐藤仙人のはからいで、当時、著名な書家であった頭山満翁に揮毫を願い、昭和四年に「下頭六蔵菩薩之塔」を建立しました。

なお、川底から引きあげられた石碑は、板碑といわれる古い供養塔で、六蔵さんとは直接かかわりありませんが、六蔵祠のなかに納められました。



旧 本 堂

安 養 院

安 養 院

所在地 東新町二丁目三〇番二三号
 境 内 六六〇〇平方米（二〇〇〇坪）
 宗 派 真言宗 豊山派
 山号寺号 武王山 最明寺
 本 山 長谷寺（奈良県桜井市初瀬）
 本 尊 阿弥陀如来 年代作者不詳
 開 山 伝 最明寺道崇北条時頼公
 現住職 平井和成
 世 代
 開 創 最明寺道崇時頼公と伝える
 （世代不詳）
 中興祐 淳 宝永元・七・八 寂
 祐光 享保六・四・六 寂
 祐通 享保一六・五・二七 寂
 弁登 宝曆一二・五・四 寂

尊	明和二・六・二八	寂
祐範	享和三・九・二九	寂
慶隆	文化一〇・六・二八	寂
慶範	文政一一・一二・四	寂
慶存	天保一三・五・四	寂
六十二世 成範	嘉永四・五・二五	寂
六十三世 秀範	万延元・一一・二五	寂
六十四世 宥成	明治四〇・三・二七	寂
六十五世 宥和	昭和二三・四・二	寂
六十六世 宥観	昭和四四・四・一二	寂
六十七世	(現住職)	

由緒沿革

鎌倉中期正嘉元年(一二五七)に、北条時頼が諸國行脚のみぎり、持仏「摩利支天」を此地に安置し一字を建立したことに始まるという。

延宝年中火災により諸堂宇灰燼に帰したのを、元禄元年(一六八八)に江戸靈雲寺浄徹律師の高弟の

祐淳大比丘が再興し、阿弥陀三尊を本尊として、本堂・庫裡・大師堂・鐘楼・山門等を造立して寺院の形態を整え「安養院」と称し近郷の真言宗の中心勢力となった。後に西新井村総持寺末の客末に列し上板橋村の長命寺をはじめ文殊院・宝蔵院・宝珠院・両眼院等を末寺として大いに栄えた。

明治十三年(一八八〇)に火災により宝蔵を焼き、従来の古文書、什器等の寺宝の大半を消失し僅かに「厨子入釈迦四面像」・「紅顔梨色阿弥陀像」等少数を残すのみとなった。

六十五世宥和権大僧正が住職となるや、大正六年に本堂・鐘楼等を大いに改め、昭和四年には庫裡を他より移築して寺観を一変して今日に至る。

昭和十五年に旧来の本末寺関係を解消し、本山を真言宗総本山長谷寺とし、その直属となった。

現在、旧本堂の解体新築中で、昭和五十八年三月には堂々たる本堂が竣工し、寺院の景観が一変する予定である。

法 会

春秋彼岸会

施餓鬼会 七月二十一日

講 大心講（御詠歌講）

堂 宇

本 堂

旧本堂 七二坪 大正七年改築

新本堂 九〇坪 昭和五八年三月竣工予定

庫 裡

もと伯爵松平基則が大工棟梁金田平吉と近藤国五郎らに命じ、住宅として明治三十五年に建築したものを、昭和四年に庫裡として買収移築したものである。約二〇〇坪

大師堂

宗祖弘法大師を祀る。建築年代不詳 約三〇坪

鐘 楼

昭和二四年重美指定の梵鐘を釣る。

重な仏像

本尊阿弥陀如来 総高一一〇厘 本体四九厘

厨子入準秘仏 作者年代不詳 木造

釈迦四面像

新編武蔵風土記にある「釈迦像一龕」である

厨子の高さ六四厘・台中四二厘×四三厘

釈迦一代記の誕生・修業・説法・入滅の四門

が木彫されている。各扉内側には江戸時代狩

野派筆の絵が画かれてある。

もと武田信玄の守本尊が後に紀伊大納言の

手に渡り、更に本寺に寄進されたという。

紅顔梨色阿弥陀如来（ぐはりじきあみだちよらい）

現在、前立本尊となっているが、曾ては本尊

であったようである。総高一〇〇厘 巾五七

厘、うち台高一二厘。孔雀の背に蓮座を置き

その上に阿弥陀坐像が定印を組み、頭上に五

智の宝冠を戴き、背に円型の光背を負う。

更にその後に見事な金色まばゆい孔雀の尾羽

が抜かる。一見孔雀明王と見まがうようである。仏体は赤色に彩られ、陽の入る西を表現している。本体は室町時代であるが、装飾は江戸元禄頃の頃であろう。類似の像は全国に於ても数少ない。

この像については、昭和二八年当院蔵の書付に三輪善之助の詳細な解説が記されている。

厨子入阿弥陀如来座像

総高五〇浬 本体二三浬 巾一八浬

厨子入愛染明王（黒色）

総高五〇浬 本体三二浬 台高二二浬

厨子入六仏

厨子高さ三〇浬 巾二二浬 厚さ八浬

厨子入愛染・地藏・不動

厨子高さ二四浬 巾二〇浬 厚さ二〇浬

厨子入愛染と四天王

厨子高さ八四浬 巾四二浬 厚さ三三浬

厨子入十一面観音

立像 本体高さ一二三浬 巾三〇浬 厚さ一三浬
聖観音像

青銅製 高さ六四浬 巾二〇浬 厚さ一六浬

厨子入摩利支天地蔵毘沙門天

厨子高さ七〇浬 巾一三浬 厚さ一〇浬

厨子入弁財天（板橋七福神の一）彫金作 昭和十二年

本体高さ二二浬 厚さ六浬

厨子入弘法大師坐像

本体高さ二七浬 巾一七浬 厚さ一〇浬

厨子入興教大師坐像

本体高さ二五浬 厚さ一七浬 巾一五浬

聖観音坐像

本体高さ六三浬 巾五〇浬 厚さ一一浬

薬師如来

総高三八浬 巾一三浬 厚さ六浬

厨子入二十仏

厨子の高さ二〇浬 巾二〇浬 厚さ一五浬

厨子入地藏立像

本体総高五〇糎 巾一八糎 厚さ九糎

赤鬼・青鬼 木造

各高さ三六糎 巾一六糎 厚さ八〇糎

観音菩薩

本体高さ五五糎 巾一五糎

勢至菩薩

本体高さ七三糎 巾一四糎 厚さ七糎

大師堂の仏像

弘法大師像

本体高さ四三糎 巾三七糎 厚さ二八糎

十王像（十体）

各の高さ三三糎 巾二九糎 厚さ二〇糎

閻魔像

総高六一糎 巾五五糎 厚さ二九糎

脱衣婆

総高六一糎 巾三四糎 厚さ二六糎

俱生神（二体）

各高さ二六糎 巾一〇糎 厚さ六糎

欽喜天

鑄造 高さ八糎 巾五糎 厚さ四糎

開山像（北条時頼入道） 坐像 木像

高さ四二糎 巾一四糎 厚さ一八糎

寺 宝

梵 鐘

昭和十八年十月一日文部省より美術品の認定を受けたため戦時中の供出をまぬかれる。昭和二十四年五月、国より重要美術品の認定を受ける。元禄二年（一六八九）鑄造の鐘にひびが入ったため享和二年（一八〇二）暮秋二七日に形態をもとのままに再鑄された。鐘の特徴は鐘面を五区に画し、百字真言を梵字で彫り、乳の間に乳をおかず、五個の撞座に真言五仏を表わす梵字が浮出されている。

同型の半鐘は昭和十六年に盗難にあい喪失す。

その他主な寺宝

銅製宝塔

総高 七七握 年代不詳

木造五輪塔

総高 六六握 年代不詳

人頭杖

総高 八四握 漆塗年代不詳

木造舍利塔

総高 五五握 径一三握 台高一九握 年代不詳

軸物弘法大師筆不動明王 一三二握×四六握

讚—武王山安養院重宝物也当院六十三世宥成求

之武蔵国豊島郡上板橋村五千百七十二番地武王

山安養院（埼玉県比企郡真光寺より移入、以下同）

同 十二天護摩講社本尊

同 大師筆上方大梵天九 軸装三九握×八五握

同 月天清涼十二 同 四〇握×八五握

外 軸装類多数（略）

花帳 一〇枚（河原興成寄進）

幢旗 一對 唐金三ツ具足 唐金灯笼一對

席 二〇流（与右衛門寄進）

外 仏具・什器類多数が檀家信者より寄進

板 碑

暦応年間（一三三八—一三四二）のものから、

年号不詳欠損のものまで含めて二十五枚存する。

古文書

安養院略縁起

大般若経 六百卷

安養院什物帳 文政十二年三月十日、慶存代

銅鐘重要美術品認定書 文部省

昭和十八年十月一日

外に

約三七〇点の古文書を存する（略）

墓 碑

北条時頼の供養塔 江戸中期ころの建立

河原家累代墓石(上板橋村名主)

檀 家

概 数 約五百戸

分 布 東新町・桜川・上板橋・小茂根

総 代 小野沢知与 飯島 寿雄 小宮信太郎

文 献

○新編武蔵風土記稿卷之十二 豊島郡之四

新義真言宗安立郡西新井村總持寺末、武王山最明

寺と号す、本尊阿弥陀は紅顔梨色尊形と号す、脇に

觀世音勢至を安す、并に運慶の作と云、法流中興祐

淳宝永元年七月八日寂す、当寺は北条相模守時頼の

中興なれば寺号を最明寺と云、又武徳を表して山号

に取ると云、正保の頃まで円徒宝珠院の傍に時頼の

影堂存し、同辺に最明寺塚と云者あり、又堂坂に最

明寺腰掛松などもありしが、九十年前枯しと云、是

皆口碑に伝るのみなれど、堂松の称呼によれば左

もあらんか、又天永貞治文明の古碑あれば古刹な

ることは論なし、什宝釈迦像一龕堂中に安置す、

赤栴檀を以て毘首羯摩が作る処と云、四面巖石の

彫刻ありて南面は華嚴說法場に擬し、巖室中に釈

迦像を安し、兩扉に日蓮迦葉をえれり、其下の窟

中は釈迦降誕の像を模し、北面は入滅の像にて是

も窟中に刻し、降誕の像と表裏をなせり、此餘大

阿羅漢并十大弟子其外種々の雕鏤あり、縁起に云

根本開基は一千余年の事なれば悉く記しがたし云

々、中古武田信玄本尊たりしを紀州家に転伝し後

故ありて当寺我師に寄進、且其時の添状等ありと

のす、我師とさせるは中興祐淳のことなるべし、

添状は何頃にか失へり、鐘樓、元禄二年鑄造の鐘

を掛、寺中、宝珠院、如意山と号す、本尊立像の

地蔵を安す、長八寸慈覺大師の作と云、宝藏院、

金剛山と号す、本尊葉師日光月光十二神持及弁天

地蔵を置、

○文化六年上板橋宿書上帳

当寺の本尊阿彌陀如来は紅顔梨色の尊像にて脇土親音勢至右三像は運慶の作、大黒天も運慶の作、釈迦如来は毘須羯摩天の作、嵯峨釈迦同木同作の尊像また根本開基は一千余年の事なれば悉く難記、当山に来るは信玄公所持の守本尊也、後紀州公へ捧其趣達高德上覽厨子の天井四方の戸扉絵古法眼子弟に被仰付仔細有我師に寄進あり、其時の添状ありとある此状今は見えず、

○北豊島郡誌

字上ノ根に在り、新義真言宗豊山派、中新井総持寺末なり、開基詳かならず、中興開基は北条時頼なりと云伝ふ、故に当寺を最明寺と称し、又武徳を奏して武王山と号す、当院は二百年前及び明治初年の二回火災あり、時頼公御影堂を初め古文書記録悉く烏有に帰し今之を知るに由なし、以下文政六未年書上を抄出して、少しく当山の状況を見ん

同国足立郡総持寺末 武王山最明寺安養院

御除地 五反七畝二十四分 寺中境内共

一新義真言宗

一本尊阿彌陀如来 紅顔梨色尊像也 一体

脇土親音勢至 右三像は運慶之作と申伝へ候

一大黒天 運慶之作と申伝へ候 一体

一釈迦如来 毘須羯摩天御作 嵯峨釈迦同木同作

之尊像也 享保年中の縁起有り

(中略)

一法流中興開山 祐淳大比丘 宝永元申七月八日寂

一半 鐘 元禄二己巳十二月十二日建立 中興開

山法印権大僧都祐淳

其他は今略す、鐘楼に享和二年の鐘をかく銘に曰

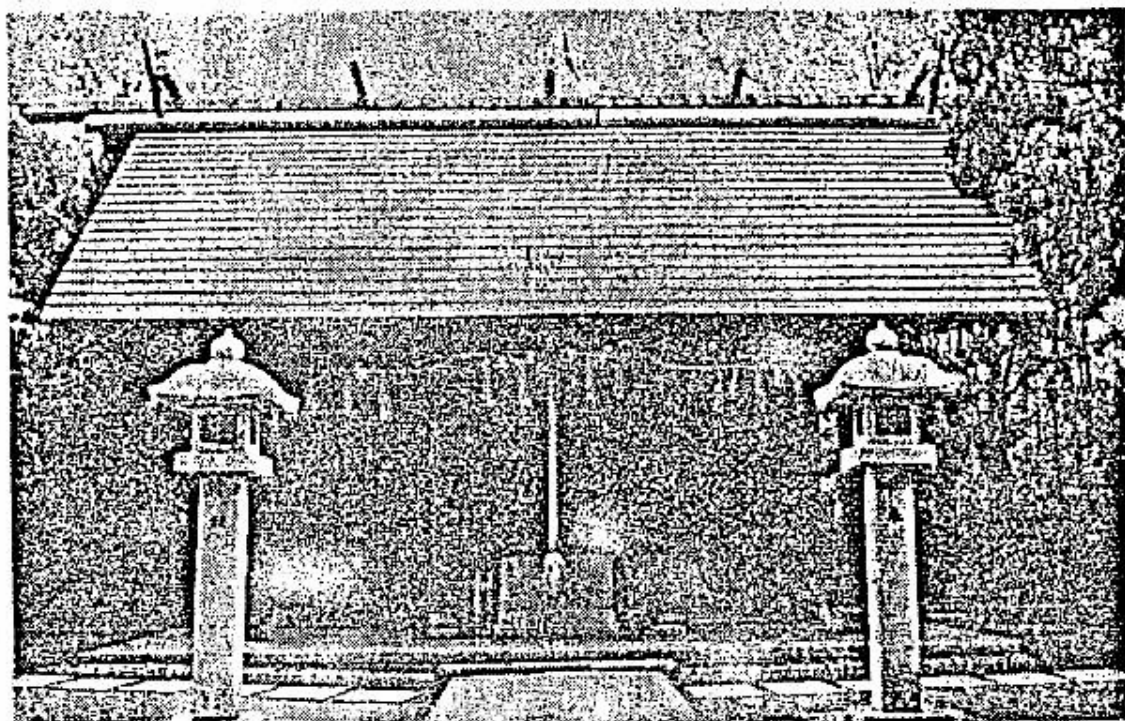
摸祇園範駭眠四生 震総持響開盤群朋 庶事時促

品物咸享 希廻洪福民豊国乎

元禄二己巳年十月二十八日

住持 浄厳銘 祐淳

(以下 略)



拜 殿

氷 川 神 社

氷 川 神 社

鎮座地 東新町二丁目十六番一号

境 内 七六四一・六平方米（二三〇八坪五一）

御祭神 速須佐之男命（はやすさのおのみこと）

由緒沿革

創立年月不詳。古老の口碑によれば此の地は、もと「上ノ根」（かみのね神泥）と言って「神流」の義であるといふ。これから察すると上板地方の本社であつたろうと謂われている。文政六年十月の上板橋村書上帳によると、「当所鎮守氷川宮但し宮居拜殿あり御除地五反四畝歩免除一反八畝拾歩」とある。江古田に浅間神社という当社の末社があるが、その創建は承平元年六月某日の降雪によって、夏雲山芳原浅間と名づけて鎮座されたと謂われる。

旧社格は村社で明治十二年五月二日に定められた。

祭日

例祭 九月十四日

月並祭 毎月一日

大祓祭 六月三十日 十二月三十日

春祭 三月二十八日

秋祭 十一月二十八日

特殊行事

氷川ビシヤ 稲荷ビシヤ ボンデンシロフセギ

二十六夜祭

社殿

本殿 樺材四方彫刻権現造 一坪五 嘉永五年

三月

幣殿 鉄筋渡屋根銅板葺 七坪五 昭和五十六

年三月完政予定

拝殿

内拝殿 鉄筋銅板葺 十坪 昭和五十六年三月

完成予定

外拝殿 木造神明型 八坪 明治三十五年三月

その他

本殿上屋 嘉永五年三月建築せしも破損せるため改

築中、昭和五十六年三月鉄筋コンクリー

ト銅板葺にて四十平方米完成予定

神楽殿 木造入母屋造亜鉛葺 七十四平方米 明

治三十五年旧拝殿を改築せしもの

手水舎 樺材造四本柱吹通し格天井瓦葺 十平方

米八〇 昭和三十七年十一月

社務所 木造二階建瓦葺 三四七平方米八〇

昭和三十三年十月

郷土資料館 木造モルタルスレート葺 七十平方

米九四 昭和四十七年十月

末社

榛名社 御祭神 火産靈神 埴山毘売神

稻荷社 御祭神 蒼稻魂命

境外社

八雲神社 向原町一四三五 御祭神 素盞鳴命

稻荷神社 茂呂三九二九 御祭神 蒼稻魂命

稻荷神社 小山三三〇三 御祭神 蒼稻魂命

神職

宮司 篠 健三

氏子範圍

常盤台四丁目 上板橋一丁目 桜川二丁目

東新町二丁目 二丁目 小茂根一丁目 二丁目

三丁目 四丁目 五丁目 向原一丁目 二丁目

講

氷川講 昭和二十一年結成

文書絵画等

文書

御毘沙台帳 元禄八年より大正十一年まで記録

資料館には大観堂蔵書外多数

宮司家のもの

古事記・万葉集・江戸名所図会・その他

絵馬

弘安の役（年月不詳）外 江戸期もの五点

明治以降の小絵馬 五九点

額

享和二年・文化十二年・文政十二年・天保十三年

氏子総代

小野沢政吉 外 三十九名

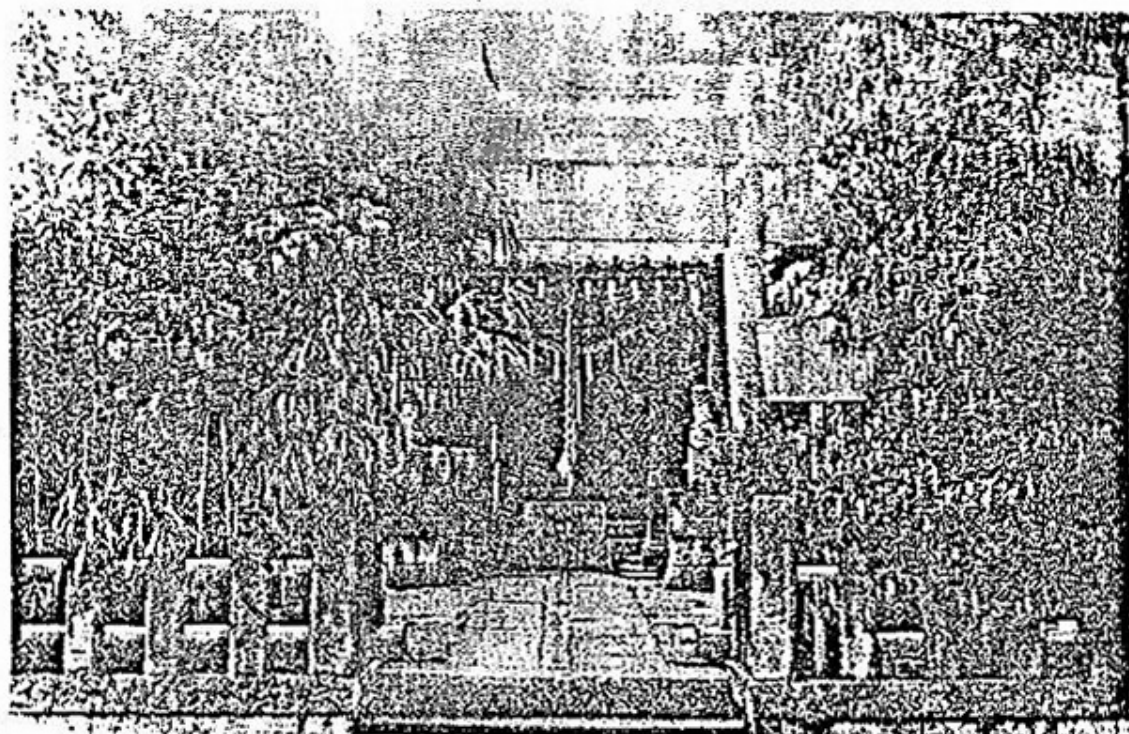
文献

○新編武蔵風土記稿卷之十二 豊島郡之四

上板橋村

神明社 村の鎮守にて長命寺持 下三社持同じ

○氷川社 ○権現社祭神詳ならず…



神社全景

轡神社

轡神社

鎮座地 仲町四十六番三号

境内 二二二平方米七(七〇坪)

御祭神 倭建命(やまとたけるのみこと)

由緒沿革

寿永年間の鎮座と古老は伝える。治承の昔、源義経が奥州平泉から鎌倉へ馳せ参する時、乗馬は疲れてゴホンゴホンと咳をしてたおれた。義経は新しい馬に乗って先を急いだが、村人たちは馬を葬り、そのくつわをはずしてまつたという。

又の伝説は、徳川家康が困めぐり際、この地に到って馬の疲れを休めたが、後に残されたくつわを村人たちがまつたともいわれている。

祭日 例祭 十月十一日 月並祭 月の十一日

特殊信仰 古来百日咳の神として信仰厚く、馬のワラジと麻を授し、麻は首にまきワラジは先を焼いて患

者になめさせるといふ。神殿には沢山のワラジと麻が供えられている。

社殿

本殿 木造神明妻入造 一坪 大正九年改築

拝殿 木造流れ造瓦葺 六坪半 右と同じ

その他

手水舎 四本柱吹通し鉄板葺 一坪

社務所 木造平家瓦葺 一一坪七五 昭和五年

神庫 木造瓦葺 一坪半

境外祠 稻荷神社 御祭神 保食神

神職

宮司 豊田 重夫

氏子範圍 特に設けていない。数十戸に過ぎない。

宝物

太鼓 享和元歳九月吉日 絵馬 五点

氏子総代

小宮 武雄 山本 秀一 高橋 利昌 新井 久江

文献

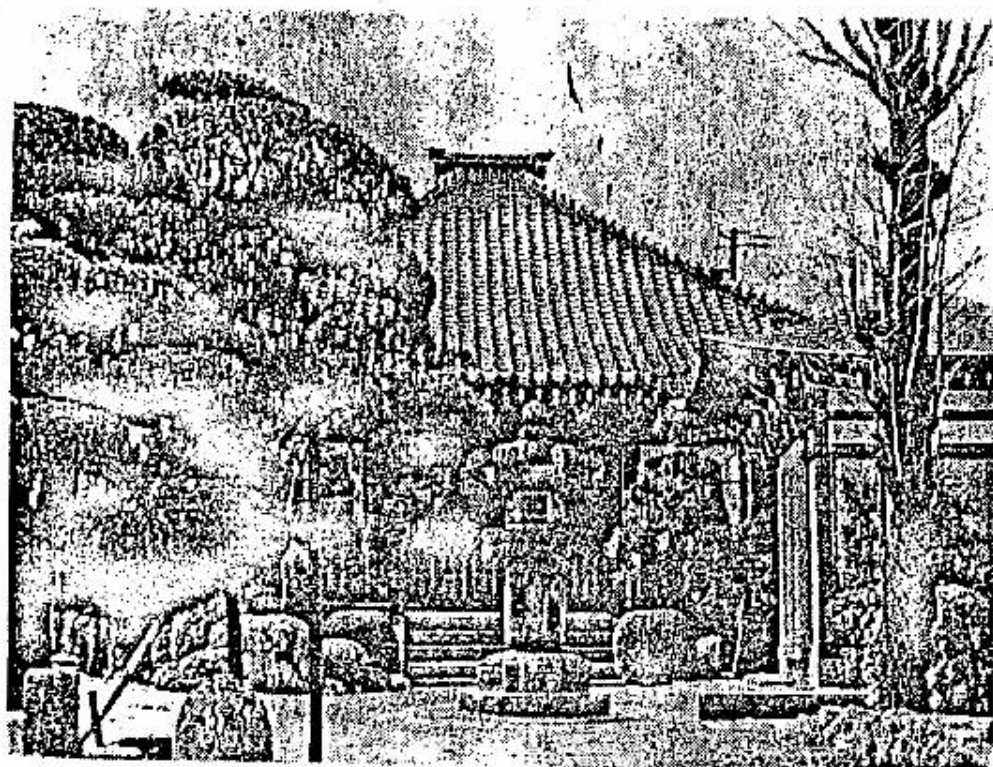
○新編武蔵風土記稿卷之十二 豊島郡之四

轡権現社

是れも東照宮御乗馬の轡を祭りしとも、また、御履を祭るとも云へど慥ならず、社に丸の内十文字の紋を彫り、人祈れば必驗ありと云、祈る者は社内に納る所の履の半片を借て、己が家に祠り、報賽の時一雙の履を納むとなり、村民持。

○北豊島郡誌

大字下板橋字山中にあり里老言ひ伝ふ昔東照宮馬を此処に止めて憩ふ、其跡に轡の在りたるを祭ると、又鏤なりとも云へど慥かならず。現に神体として崇めあるは馬蹄石と称する直径三寸周圍一尺二寸の化石にて其の傍に長さ一尺余巾五、六寸位の碑型の石あり、表面両社権現御本地阿弥陀如来、脇に宝永庚寅年六月、下に下板橋本屋喜右エ門と刻しあり。近年社の裏山より五個の古碑を発掘す。其の一基に文明五年道修禪門とあり、全部光林庵墓地に存す。



本院 院称専

院称専

所在地 仲町四四番一号

境内 二四〇九平方米（七三〇坪）

宗派 浄土宗

山号寺号 亀島山 地藏寺

本山 智恩院（京都市東山区林下町）

本尊 阿弥陀三尊仏（江戸中期作者不詳）

開山 寺伝には、開基豊島清光、開山行基

とあるも不詳。中興開山は祐天、開基は白倉四

部左衛門。宝永四年（一七〇七）

現住職 玉山成元

世代

開山 明蓮社顕答愚心祐天上人

享保三・七・一五 寂

二世 信誉上人

三世 讚誉上人

四世 得譽上人

五世 善蓮社諸譽心無源長上人

明和六・一〇・一五寂

六世 精譽上人

七世 承譽上人

八世 住譽上人

九世 皆譽上人

十世 法譽上人

十一世 蓮蓮社啓譽広阿普濟度達善上人

文政元・九・一五寂

十二世 津蓮社榮譽任阿知足源海上人

天保二・四・九寂

十三世 (不明)

十四世 勇蓮社進譽猛阿精善縁中上人

明治一七・八・五寂

十五世 阿道上人

十六世 戒蓮社慧譽定学上人

明治九・七・二三寂

十七世 玄州上人

十八世 辨恭上人

十九世 大善上人

二十世 徳苗上人

二十一世 海音上人

二十二世 大祝上人

二十三世 大英上人

二十四世 深蓮社誠譽旭阿明諦源豊上人

昭和一〇・六・二〇寂

二十五世 心蓮社敬譽有阿至心大誠上人

昭和一三・八・二四寂

二十六世 深蓮社禪譽信阿正覚大音上人

昭和一九・一二・四寂

二十七世 清蓮社淨譽光阿明照玄重上人

昭和五五・三・一一寂

二十八世 光蓮社徳譽信阿知世成元上人

(現住)

由緒沿革

中世の頃から豊島七仏の一つを安置し多くの庶民の信仰を集めていた地藏堂があった。宝永二年、祐天が村民四郎左衛門の請を入れ豊島村地藏堂として再建し、諸堂を整え、宝永四年に亀島山地蔵寺専称院と公称して小石川伝通院末となり、浄土宗に転宗した。文化十年に境内に閻魔堂を合祀し、子育地藏と共に世人に親しまれ信仰を集めた。

昭和七年都市道路計画により豊島（現王子）より現地への移転を決し、同十五年移転完了して香林庵を合併した。香林庵は明治七年七月板橋学校発祥の寺である。

法 会（主なもの）

施餓鬼会法要五月三十日 十夜法要十月三十日

堂 宇

本 堂 四二坪 江戸末の建築であるが移転

の際、手を加え改修した。

庫 裡 八〇坪 戦後の建築

閻魔堂 文化十年ころの建築であったが、明

治の頃に崩壊し、昭和十五年の移転の際、

仮堂となり、昭和五十三年新築

書 院

境内祠

大地蔵 子育地藏 道祖神

境外堂

地藏堂 北区豊島にあり

主な仏像

本尊阿弥陀三尊坐像 江戸中期作者不詳

地藏菩薩立像 桧寄木造・金泥文彩色 高さ二

尺 南北朝から室町初期の作 作者不詳

阿弥陀如来坐像 木彫漆箔 高さ二尺三寸

江戸初期宝永頃の作 作者不詳

地藏坐像 木彫漆箔 高さ二尺

江戸初期宝永頃の作

祐天上人坐像 木造 高さ九寸 江戸中期作

作者不詳

釈迦涅槃像 木造 横四八握 高さ一〇握

墨書の銘記あり。実相院一運智道居士横井

家先祖代々一切靈菩提也 亀島山尊称院第

十一世代。

地藏菩薩立像 木造 高さ五九握 台座とも

・八三握 室町中期の作 稲村坦元鑑記 作

者不詳

外に、法然上人坐像・善導大師坐像あり

閻魔堂内の像

閻魔坐像 木造 高さ一三〇握 巾一〇七握

不動坐像 木造 高さ四五握 巾四〇握

庫裡の仏間の像

阿弥陀立像 木彫金泥 高さ二四握

書画その他

祐天上人筆六字名号 厨子(一一〇握)入

祐天上人白画像 厨子(一一〇握)入り

百万遍珠数 首珠に祐天刻の「弥陀」あり

曼荼羅 類

涅槃曼荼羅 絹本極彩色 江戸後期 作者不

詳 巾一一七握 高さ二五〇握

三尊曼荼羅 絹本 巾一〇七握長さ二〇五握

増上寺六十六世大僧正冠慧殿(鎌倉光明寺

九十一世)の筆

釈迦多宝曼荼羅 絹本着色 巾一〇六握長さ

三〇六握 伝通院後中興立玄順筆

阿闍多宝曼荼羅 絹本着色 巾一〇七握長さ

三〇四握 明治元年作 鎌倉光明寺九十二

世浄蔵筆(智恩院七十二世)

文珠菩薩 探幽济法眼筆 軸物

福祿寿 高嵩谷 筆 軸物

亀島山地蔵院記 外 古文書類多数

墓 碑 高柳光寿博士(近代歴史学興隆の祖)

檀 家

概 数 二五〇戸

分 布 板橋(仲町・大山・大山西・双葉

中丸) 北区(特に豊島六丁目)

総 代

岡田 重治 小宮 武雄 荒井健多郎

高橋 利昌 岡田 健児

文 献

○新編武蔵風土記稿卷之十七 豊島郡之九

浄土宗小石川伝通院末、亀嶋山地蔵寺と号す、木尊

阿弥陀外に行基の作れる地蔵を安す、縁起の略に、

豊島左衛門清光志願のことありて行基と謀り、豊島

の内に七ヶ所の堂を建仏像七軀を彫刻して安置す、

此地蔵は其一なり、外六体は西福寺阿弥陀、清光寺

不動、同じ境内釈迦、観音寺観音、其余二体は今堂

宇庵す、此寺当寺は地蔵堂にて専称庵と号せしを、

宝永二年村民四郎左衛門と云者、祐天僧正を掃依し

当庵を興隆せんことを願ひしに、祐天其志を感じ遂

に一寺となし、山号等を命じて伝通院末となせり、

故に祐天を開基とす、其頃の住僧を正参順応といへ

り、清光と行基年代疎齟せしことは既に西福寺の条

に弁せり(注 西福寺の条―世人の口碑に伝る所な

れば、其略を記しおきぬ、且つ清光は権頭と称し、

治承の頃の人なれば行基とは時代遙に後れたり)、

本堂に祐天開眼の地蔵を置、又祐天の与えし百万遍

の珠数を蔵す、其魁首の珠に祐天自ら弥陀の名号を

刻す

○北豊島郡誌

豊島の地であり、宝永二年、祐天大僧正此地の住人

白倉四郎左衛門といへるものの助に依つて建つる処

なり。

○遊歴雜記

(前略) 祐天随喜入仏供養然るべしとて、宝永四年

正月廿七日数多の寺僧を具し入仏の法要あり則ち亀

嶋山地蔵寺専称院と号し……(後略)